

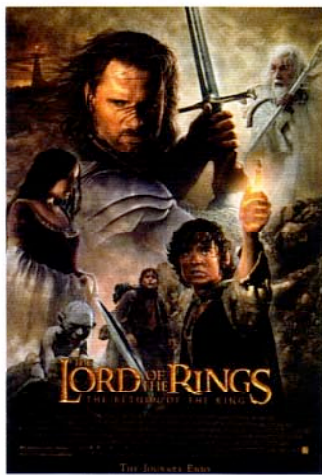
THE LORD OF THE RINGS The Return of The King

～ロード・オブ・ザ・リング～王の帰還

Movie

監督・脚本：ピーター・ジャクソン

製作年：2003年／製作国：アメリカ／製作：ニューラインシネマ



New Line Productions, Inc.

三部作を三年がかりで公開した映画「ロード・オブ・ザ・リング」は、ご存じの方も多しと思えますが、英国の作家J.R.R.トールキンの「指輪物語」を映画化したものです。映像化は不可能と言われた大作ですが、熱心なファンであったピーター・ジャクソン監督が、最新のCG技術を駆使して映画化したもので、原作の魅力が受け継がれています。

原作には世界中に多くのファンがいますが、読み方は様々で、かつては、物語は核兵器廃絶を訴えているとか、東西冷戦を象徴しているなどという意見もありました。しかし、作者はこのような解釈を嫌っていました。彼にとっては物語を書くことは、「準創造」という行為で、それは、神が創造された世界(第一の世界)の真実を空想の世界(第二の世界)に、まざまざと目に見えるものとして表現することなのです。「空想」とは、いつも「準創造」は、作りこむの世界を、つち上げることではなく、創造主に似たものに造られた人間が、創造者の歓びをもって、すみずみまで一貫性をもつひとつの世界を築き上げることなのです。ですからトールキンは、物語の世界のために、地図や歴史や家系図や暦や言語や、その言語のための文字までも作り出しました。映画版でも、エルフ語の発音や、ドワーフ文字の監修(ごちらの言語もトールキンの創作)のために専門家の指導を受け、セットや衣装はもちろん、小道具のひとつひとつまで、作品中の文化や伝統を表すように

デザインされ、専門の職人によって作られています。トールキンによれば、このようにして準創造された世界は、私たちが現実世界の「真実」を見ることができない視野をとりもどす「こと」を可能にしてくれるのです。ですからこの作品の最大の魅力は、神が創造された世界の真実が「準創造」されていることなのです。人生のまざままな真実を、特にこの世のもっとも深遠な真実、すなわち聖書に書かれている人類の救いの真実を、宝探しのようにつけることができます。

二年前に第二部「旅の仲間」を取り上げたときにも触れましたが、イエスキリストの持つ二つの面を、ふたりの登場人物の中に見出すことができます。つまり、人々の身代わりになるのを捨てる救世主の面(フロド)と、預言され待ち望まれた王(アラゴルン)としての面です。フロドの苦しみと恐怖に満ちた孤独な旅に、ゲッセマネの主の横顔を垣間見たり、成し遂げるべき大きな責任を自覚しながらも、行く先々で出会う人々の悩みや苦しみにひとりひとり寄り添って助けずにはいられないアラゴルンの姿に、「仕えられるためではなく仕えるために来た」とおっしゃった主の背中を見る思いがします。

宝さがしを続けましょう。指輪は世界を支配する力を与えてくれます。しかし「強大な権力を正しい人物が正しい目的のために使えばいいではないか」という現実の世界でよく聞かれる議論を、この物語の賢者たちは、否定します。冥王が存在する限り、世界を支配する権力(指輪)を、正しく使いこなせる者などないからです。第三部「王の帰還」では、首都攻防の戦闘シーンの後、最終戦略会議が開かれ、アラゴルンがまだ戦える人々を率いて冥王の国に戦いを挑んでいきます。これは自分たちを捨て駒にする作戦で、その目的は、冥王の目を、指輪を破壊する旅を秘かに続けているフロドからそらすため、彼が成功する可能性をわずかでも高めるためです。映画では

ここで冥王が直接アラゴルンに語りかけます。彼の名を呼び、さらに彼が王になったら名乗るはずの名を呼びます。これは誘惑です。「敵対するのをやめて私にひれ伏せ。そうすればおまえを王にしてやる」と言っているのです。けれども次の瞬間彼が「フロドのために」と言って先頭を切って敵陣に切り込んでいくとき、彼は、もしフロドの旅が成功しないなら(救いが達成されないなら)、世界の王になることに、もはや価値はないと答えているのです。「人はたとえ全世界を手に入れても……」。

また、指輪の魔力にとりつかれたゴラムも印象的です。ゴラムの中には、まだ彼が素朴な普通の人(スミアゴル)だった頃の名残りがあって、二つの人格がせめぎあっています。ひとりの人物の中に、フロドを裏切って指輪を奪えと勧めるゴラムと、そんなことをしてはいけないというスミアゴルが同時に存在しているのです。そんなゴラムを見ていると、パウロのことばを思い出します。「私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。(ローマ7章19節)」フロドがサルマンを救う場面が映画になかったのは残念です。サルマンはかつては力と英知に満ちた偉大な魔法使いでしたが、指輪の魔力に屈し、権力を求めて堕落していきます。指輪が滅ぼされた後も、彼の心は悔い改めには遠く、むしろフロドを憎んでいました。サルマンがフロドを殺そうとして失敗したとき、まわりの者たちがサルマンを殺そうとするのを制止して、フロドはこう言うのです。「かれは随分だ。そしてその救済はわたしたちの力には及ばぬ。しかしそれでもわたしはかれがそれを見いだすことを望んで、命を助けたいと思う。」

みなさんも映画を観て、できれば原作も読んで、トールキンの準創造した世界を旅して、この第一の世界の真実を見つけ、味わってみてください。(FJボブデンティア・スタップ金子登志江)